

～ 安全に調査を行うために ～

⚠️ 調査は数名のグループで

事故防止のために、調査は数人のグループで行って下さい。1 人だけでの行動は大変危険なので絶対に避けて下さい。

⚠️ 準備は万全ですか？

- ・体調が悪い時には、無理をしないようにしましょう。
- ・暑い時期の調査では熱中症予防のため、水分・塩分（スポーツドリンク）をこまめに補給しましょう。
- ・万一事故やケガがあった場合のために、緊急連絡先をあらかじめ調べておき、携帯電話を忘れずに持って行きましょう。最小限の薬などを入れた野外用救急箱を携帯しましょう。

⚠️ 安全を確認してから川に入りましょう

- ・川の流れるは日によって異なります。また調査地が晴れていても上流で雨が降っている場合には増水することもあります。あらかじめ天気予報などを調べておきましょう。
- ・川底には空きカンやガラスビンなどが落ちていて、はだしやサンダルで入るのは危険な場所もあります。胴長や濡れてもよい靴をはいて調査して下さい。胴長をはいた時は、危険防止のためできるだけライフジャケットを着用しましょう。
- ・調査は川底が見えるところで行って下さい。水深としては30cm程度までのところで、これよりも深いところには危険ですから入らないようにして下さい。
- ・川岸からは安全そうに見えても、川底が急に深くなっていたり、やわらかい泥で足をとられたりすることがあるので、十分に気をつけて歩いて下さい。
- ・大変きたないと思われる場所で調査する場合には、ビニール手袋やゴム手袋などをはめて調査して下さい。

⚠️ 危険な動物に注意しましょう

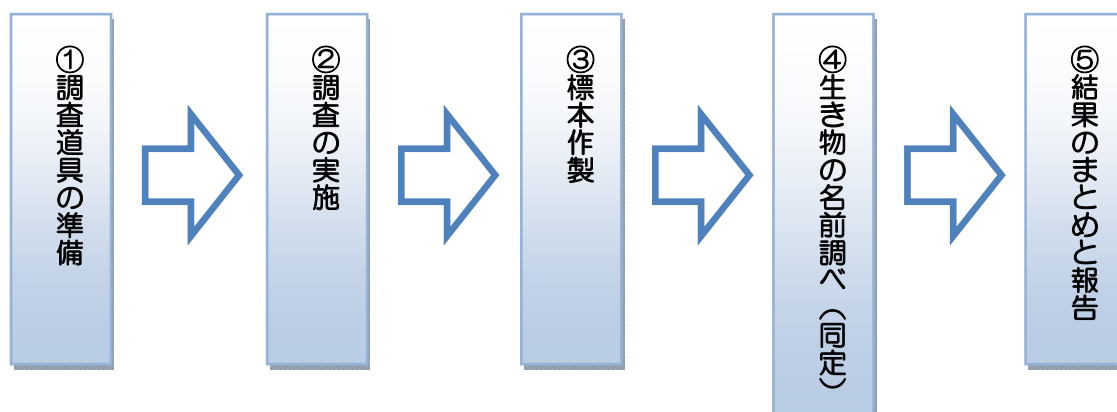
- ・草むら等に立ち入る場合には、ヘビやハチなどの有毒生物に注意しましょう。
- ・山奥の調査場所では、クマなどの野生動物やヤマビルの吸血などにも注意しましょう。

● 緊急連絡先一覧（調査を行う前に調べておきましょう）

最寄りの消防署（119）	TEL
最寄りの警察署（110）	TEL
救急病院	TEL
神奈川県環境科学センター	TEL：0463-24-3311

～ 生物調査のすすめかた ～

● 調査のながれ



① 調査道具の準備

現地調査には、以下のような道具を使います。

専門的な調査道具については、神奈川県環境科学センターから貸し出します。

植物調査	植物を入れるビニール袋、剪定ばさみ、新聞紙 (水草を調査する場合は、胴長、ライフジャケット、ジッパー付きビニール袋)
魚類調査	胴長、ライフジャケット、タモ網、バケツ、白色バット、観察用アクリル水槽、 サンプル瓶、固定液 (エタノール)
底生動物調査	胴長、ライフジャケット、タモ網、バケツ、白色バット、ピンセット、ルーペ、 サンプル瓶、固定液 (エタノール)
【全項目共通】 記録用紙、筆記用具、カメラ、調査マニュアル、図鑑 (必要に応じて) 水質測定機材 (棒温度計、デジタル水温計、透視度計、溶存酸素計、pHメーター、COD用パックテスト)	



タモ網



胴長 (ウエダー)



バット

②調査の実施

まず調査の日時、場所、当日の水質の状況などを記録した後に、実際の生物の採集や記録を行います。

調査の対象とした生物だけでなく、調査を行った場所の写真を撮影したり、気づいたこと（水の濁りやにおい、工事の状況、最近の洪水の状況など）を記録しておくこと、後で調査結果を分析する時に役に立つことがあります。

【植物】

河原や水辺を歩きながら、生育する種を確認します。水草を調べる場合は、胴長などで川に入って調査することもあります。水辺では川の水面からの高さに応じて様々な植物が生えているので、注意してみると良いでしょう。現地で名前がわからない植物については、写真を撮ったり、標本にして、後で詳しく調べられるようにします。

植物を調べるには、多くの花がみられる春と秋が調査に適しています。

【魚類】

川の底や岸辺の植物の中、よどみなど、様々な環境に生息する魚類をタモ網等でつかまえます。

流れの速い場所では投網が有効ですが、投網などの漁具を使う際には県からの許可が必要ですので注意してください。

つかまえた魚は、観察用のアクリル水槽に入れると、色や形などが詳しくわかり、写真も撮りやすくなります。

ハゼ科のヨシノボリの仲間のように、現地で名前をつけるのが難しい種は、標本にして、後で詳しく調べられるようにします。

魚類の調査は、初夏から秋までが、適切な季節といえるでしょう。



【底生動物】

川の底や岸辺の植物の中に生息する底生動物を、タモ網でつかまえます。

一般に、水生昆虫の多くは、ひざ下程度の水深でこぶし大の石がごろごろしている場所にいますが、川岸近くの緩やかな流れの場所やヨシなどの植物が茂った場所にいる種類もありますので、できるだけ多くの環境で採集してください。

タモ網で採集したら砂やゴミと一緒にバットに移して、底生動物だけをピンセットなどを用いてより分けます。

底生動物は小さいものが多いため、現地では種類がわからないものが多いです。標本にしておくと後で詳しく調べることができます。

多くの場合、河川の調査は夏休み前後に行われることが多いようですが、水生昆虫は早春～初夏に羽化する種が多く、夏季には水生昆虫は小さなものが多くなります。様々な季節に調べてみることも重要ですが、年に1回のみ調査であれば多くの種類の幼虫が大きく成長した3～5月頃が適しています。

③標本作製

詳しく種名を調べるときや名前がわからない種類を専門家に聞きたい場合は、標本にしておく必要があります。

【植物標本のつくりかた】

草の場合は根を含む植物全体を、木の場合は葉と花、あるいは果実のついた枝を標本にします。草の標本も花や実がついたものの方が、後で名前が調べやすくなります。なお、根から採集した植物は、根を洗って泥を落としておきます。

標本は、新聞紙の間に挟んで乾燥させます。分厚い葉などは乾燥しにくいので、何度か新聞紙を換えると良いでしょう。採集年月日、場所などを忘れないようにメモしておきます。



【底生動物・魚類標本のつくりかた】

標本を作成する場合は、現地ですぐにアルコールに入れます。

- ・アルコール（エチルアルコール）：水生生物を固定し、保存するために必要です。通常70～80%のアルコールを用います。固定にはホルマリン（3～5%）を用いた場合がよいこともありますが、劇物で取り扱いに注意が必要ですので、アルコールのほうが良いでしょう。
- ・サンプルビン（密閉できるビン）：アルコールは揮発しやすいので、密閉できるビンに保存しておくことが必要です。時々アルコールが減っていないか点検してください。
- ・ラベル：採集年月日、場所、生き物の名前などを書いた紙を標本と一緒にビンに必ず入れて保管するようにしてください。ラベルは地点番号の略号だけでなく誰が見てもわかるような書き方にするようにしましょう。後で見直すときにもその方が役に立ちます。ラベルへの記入は製図用インクか鉛筆等を用いてください。



④生き物の名前調べ（同定）

調査マニュアルに載っている検索や図鑑などをもとに、詳しく名前を調べます。

名前を調べるための図鑑や顕微鏡、サンプル瓶や必要な薬品などは、神奈川県環境科学センターに備えてありますので、ぜひ活用してください。

また、どうしても名前がわからない場合は、標本を専門家に鑑定してもらいます。

生物の写真をSNSに投稿すると、専門家から様々なアドバイスを受けることができます。

また、標本を事務局に送り、専門家に標本を鑑定してもらうこともできます。

⑤結果のまとめと報告

結果を記入した調査表を、事務局に提出してください。

貴重な調査記録として活用していきます。

また、調査の状況や気づいた点、調査時の写真などをまとめて、報告書にするのも良いでしょう。

底生動物では、種類から水質の状況を分析する方法もあり（調査マニュアルを参照）、調査結果から、様々なことが考えられると思います。

⑥特定外来種について

現在、日本各地で外来種が問題となっています。その対応策として、特定外来生物による生態系等に係る被害の防止に関する法律（外来生物法）により、特に他の生物、環境、人間に影響があると考えられる種について、特定外来生物として指定されています。

特定外来生物は**移動、飼育が法律により禁止**されています（下表）。

相模・酒匂川水系で見られる可能性の高い特定外来生物

分類	種名
両生類	ウシガエル
魚類	カダヤシ、ブルーギル、コクチバス、オオクチバス
植物	オオキンケイギク、オオカワヂシャ、アレチウリ、オオフサモ、ボタンウキクサ

特定外来種が採れてしまったら？

以下の表を参考にして、処分をしてください。重要なことは、「生息範囲を現在よりも広げないこと」です。

状況	分類	対処法	具体的な方法
調査で採れて、 その場で特定外来生物と わかった場合	植物	放置	殺処分できる状況ではないほど茂っていることが多いので、そのまま放置する
	魚類 足の生えていないオ タマジャクシを含む	殺処分 (放置)	採れた川の河原や川縁に埋める (情情的に殺処分できないときは、必ず採取された場所に戻す)
	両生類	殺処分 (放置)	殺す (情情的に殺処分できないときは、必ず採取された場所に戻す)
調査で採れた生き物で、 持ち帰って同定した結果、 特定外来種とわかった場合 (魚類・両生類で標本になっ ているものは除く)	植物	処分	種等が飛ばないように、袋に入れて封をして、燃えるゴミとして出す
	魚類 足の生えていないオ タマジャクシを含む	殺処分	・そのまま土に埋める ・冷凍して殺してから燃えるゴミとして出す
	両生類	殺処分	冷凍してから燃えるゴミとして出す

参考：環境省ホームページ 外来生物法 <http://www.env.go.jp/nature/intro/index.html>
(Yahoo や Google で、「環境省 外来生物法」で検索すると、一番上にできます。)

ウシガエル

分類: カエル目アカガエル科

学名: *Rana catesbeiana*

英名: Bullfrog

和名: ウシガエル

別名・流通名: 食用ガエル、ブルフロッグ

原産地と分布: 北アメリカ東部(カナダ東南部からメキシコ中部に至る)。食用のために、西インド諸島やアメリカ合衆国西部、ヨーロッパ、台湾、韓国、日本等に広く(北海道南部から小笠原諸島、八重山諸島に至る)等に広く移入されている。

未判定外来生物: アカガエル属(*Rana*)のうち、ウシガエルを除いたウシガエル種群、ブロンズガエル*R. clamitans*、ブタゴエガエル*R. gryllot*、リバーフロッグ*R. heckscheri*、カーペンターフロッグ*R. virgatipes*、ミンクフロッグ*R. septentrionalis*、フロリダボグフロッグ*R. okaloosae*の6種。
種類名証明書添付生物: ウシガエル種群。

形態的特徴: きわめて大型になるガエルで、成熟個体の鼻先から肛門までの長さは11~18cm。変態したばかりの子ガエルでも4~6cmある。後足のみずかきがよく発達しており、広がる目立つ。目の後ろから鼓膜の上縁を経て下向きに折れ曲がる皮膚のひだが明瞭。これより後方には皮膚のひだ(背側線隆条)がない。背面の皮膚はややざらつき、腹面は平滑。背面、腹面とも虫食い状の不規則な褐色斑を有するものが多い。若い個体は背面上に小さな黒斑が散らばっている。雄の鼓膜はきわめて大型で、目の直径の1.3~1.7倍に達する。雄の喉は黄色い。

全身



雄の頭部



特記事項: 食用や実験用として生きざま流通している。中国から生きざま冷蔵状態で輸入されており、それらはほとんど食用に供される。また国内では関東平野を中心に採取されており、これらは実験用などに供給されている。本種のような利用は今後も続くと思われる。鼓膜から後ろに延びる背側線隆条がなく、皮膚に大きなイボや隆起がないこと、後足のみずかきがよく発達していることが特徴。未判定外来生物であるウシガエル種群のカエルは、いずれも比較的大型で、後肢が長く後肢のみずかきが発達している。目の後ろから後方に向かう皮膚のひだ(背側線隆条)がウシガエルと同様に全くないもの(ブタゴエガエル等)、胴の中程まで見られるもの(ブロンズガエル等)がある。

カダヤシ

分類: カダヤシ目カダヤシ科カダヤシ属

学名: *Gambusia affinis* Baird and Girard, 1853

英名: Mosquitofish

和名: カダヤシ

別名・流通名: タップミノ

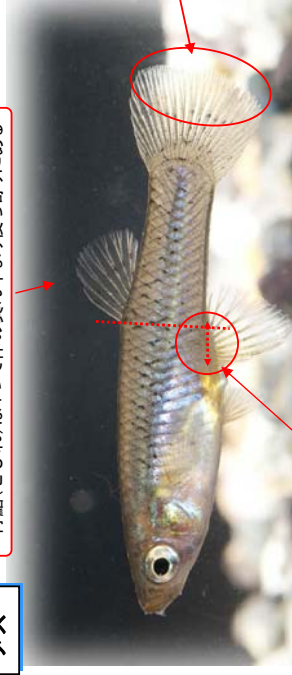
原産地と分布: 原産地は北アメリカ(メキシコ北部~アメリカ合衆国ミシシッピ川流域)。現在では、移殖により、日本を含む世界各地に分布する。

未判定外来生物: *Gambusia holbrooki*
種類名証明書添付生物: カダヤシと*Gambusia holbrooki*

形態的特徴: 体高が低く頭が尖り、メダカに似た体型をしている。口は小さい。背鰭(せびれ)は体の真ん中よりも後方にある。背鰭、臀鰭(しりびれ)ともに基底は短い。メスでは背鰭、臀鰭ともに後端が丸く同じような形をしているが、成熟したオスでは臀鰭は細長く変形して交尾器になる。交尾器は非常に長く、腹鰭(はらびれ)の長さの数倍になる。メスの背鰭基部は臀鰭基底の真ん中よりも後方にある。尾鰭(おひれ)の後縁は丸い。鱗(うろこ)は大きく、側線鱗数は28~32。背鰭前方の鱗数は16~17。体はやや青みがかった灰色~灰褐色。体側上部に小さな黒い点がある事もある。全長はオスで3cm、メスで5cm程度までになる。

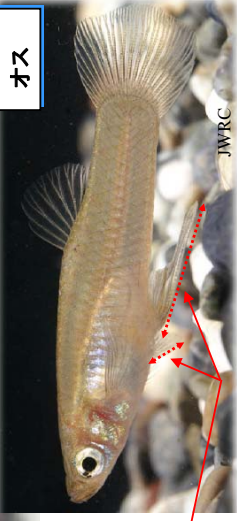
メス

背鰭(せびれ)は1つで体の真ん中より後ろ寄りにある



オス

背鰭(せびれ)基部は臀鰭(しりびれ)基底の真ん中より後ろ



オスの臀鰭(しりびれ)は変形して交尾器になる
交尾器は腹鰭(はらびれ)より著しく長い

特記事項: カダヤシは各地の水田や用水路、池沼などに普通に生息しているため、水生生物調査や観察会などで採集されることがある。しかしながら、本種の飼養等は学術研究を除き原則的に禁止されており、生きのままの取り扱いは外来生物法に従って適切に行わなくてはならない。本種の防除については、ニュージーランドで様々な手法により実施されてきたが、日本では効果的な手法が確立されておらず、これまで対策が講じられることはなかった。今後は、メダカ等の在来生物の生息地保全のために、外来生物法に基づき、これ以上の分布拡大の防止に努めるとともに、すでに定着している水域では必要に応じて被害の低減等の対策を講じることが望まれる。なお、観賞魚として多数流通しているメダカ、グッピーなどを含むメダカ科やカダヤシ科には、カダヤシと形態が類似しているものもみられるが、体色や鰭の位置などに注目すれば、比較的容易に識別することができる。

特定外来生物同定マニユアル

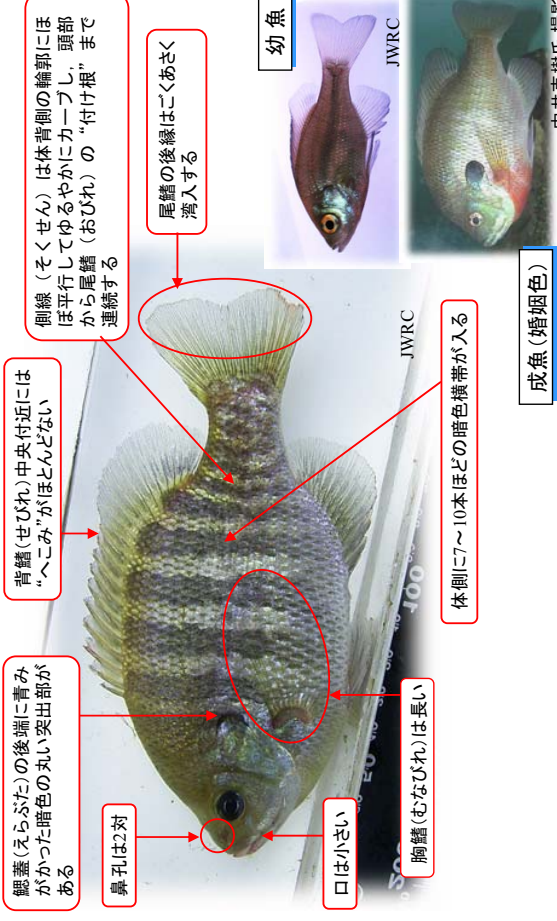
ブルーギル

分類: スズキ目サンフィッシュ科

学名: *Lepomis macrochirus* Rafinesque, 1819
英名: Bluegill
和名: ブルーギル
別名・流通名: ギル, ブルーギルサンフィッシュ
原産地と分布: 原産地は北アメリカ(メキシコ北部〜アメリカ合衆国東部)。現在では、移植により、日本を含む世界各地に生息する。

未判定外来生物: サンフィッシュ科全種 (オオクチバス、コクチバス、ブルギルを除く)
種類名証明書添付生物: ナンダス科の1属 (*Nandus*)、プリストレビス科の1属 (*Pristolepis*)、ポリケントルス科の2属 (*Africanus*, *Polycentropsis*)

形態的特徴: 体高が高い。口は小さく、顎の後端は眼の前縁下付近に達する程度。鼻孔は2対。側線(そくせん)は体背側の輪郭にほぼ平行してゆるやかにカーブし、頭部から尾鰭(おびれ)の“付け根”まで連続する。背鰭(せびれ)中央付近には“へこみ”がほとんどない。胸鰭(むなびれ)は長い。尾鰭の後縁はごくあかく湾入する。鱗は細かく、側線鱗数は40~44。体は淡灰褐色で、体側に7~10本ほどの暗色横帯がはいり、鰓蓋(えらぶた)の後端に青みがかる暗色の丸い突出部がある。最大で全長41cmのものも報告されているが、ふつうは25cm程度まで。



特記事項: 日本各地の河川や湖沼、ため池などに広く定着し、遊漁の対象にされているが、外来生物法により生きたままの個体の運搬、保管、飼養が原則的に禁止されているため、捕獲時には適正に取り扱わなくてはならない。内水面漁業や水生生物調査、自然観察などで捕獲されることもあるが、その際の取り扱いについても同様である。在来生態系保全や漁業資源保護のために、各地で防除事業が実施されており、自治体によっては条例で再放流を禁じている。今後とも、これ以上の分布拡大の防止に努めるとともに、すでに定着している水域では必要に応じて被害の低減等の対策を講じることが望まれる。なお、防除の方針については、「オオクチバス等に係る防除の指針」を参照されたい。

特定外来生物同定マニユアル

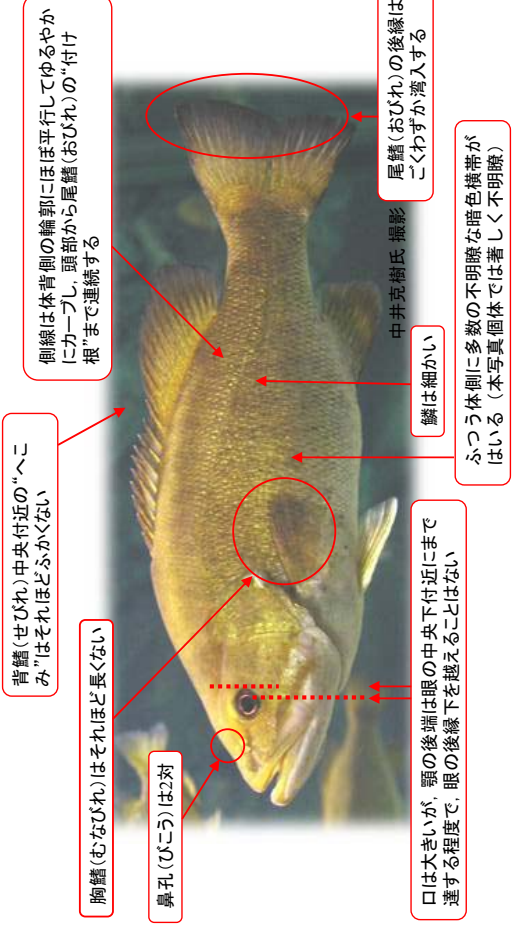
コクチバス

分類: スズキ目サンフィッシュ科

学名: *Micropterus dolomieu* Lacépède, 1802
英名: Smallmouth bass
和名: コクチバス
別名・流通名: スモールマウスバス、バス、ブラックバス、クロマス、コクチクロマス
原産地と分布: 原産地は北アメリカ(アメリカ合衆国東部)。現在では、移植により、日本を含む世界各地に生息する。

未判定外来生物: サンフィッシュ科全種 (オオクチバス、コクチバス、ブルギルを除く)、パーチ科の4属 [*Gymnocephalus*, *Perca*, *Sander* (= *Sitostedion*), *Zingel*]、ベルキクチバス科の4属 (*Percichthys*, *Goodeopsis*, *Maccullochella*, *Macquaria*)、モロ本科の2属 (*Morone*, *Dicentrarchus*)、ケツギヨ科の2属 (*Siniperca*, *Hypopterus*)
種類名証明書添付生物: アカメ科の1属 (*Ucaes*)、ケントロポムス科の1属 (*Centropomus*)

形態的特徴: 体高が低い。口は大きく、顎の後端は眼の中央下付近にまで達するが、眼の後縁下を越えることはない。下顎は上顎よりも前につきだす。鼻孔は2対。側線(そくせん)は体背側の輪郭にほぼ平行してゆるやかにカーブし、頭部から尾鰭(おびれ)の“付け根”まで連続する。背鰭(せびれ)中央付近の“へこみ”はそれほど深くない。胸鰭はそれほど長くない。尾鰭の後縁はごくあかく湾入する。鱗は細かく、側線鱗数は68~81。体は茶褐色で、背鰭(せびれ)が暗色がかかり、腹部は白色にちかい。ふつう体側に多数の不明瞭な暗色横帯がはいり、最大で全長69cmのものも報告されているが、ふつうは50cm程度まで。



特記事項: 日本各地の河川や湖沼などに広く定着し、それらの水域や管理釣り場などで釣り魚として利用されているが、外来生物法により生きたままの個体の運搬、保管、飼養が原則的に禁止されているため、釣獲時には適正に取り扱わなくてはならない。内水面漁業や水生生物調査、自然観察などで捕獲されることもあるが、その際の取り扱いについても同様である。在来生態系保全や漁業資源保護のために、各地で防除事業が実施されており、自治体によっては再放流を禁じている。今後とも、これ以上の分布拡大の防止に努めるとともに、すでに定着している水域では必要に応じて被害の低減等の対策を講じることが望まれる。なお、防除の方針については、「オオクチバス等に係る防除の指針」を参照されたい。

オオクチバス

分類: スズキ目サンフィッシュ科

学名: *Morone saxatilis* (Walbaum, 1792)

英名: Largemouth bass

和名: オオクチバス

別名・流通名: バス, ブラックバス, クロマス, オオクチクロマス, フロリダバスあるいはフロリダラージマウスバス(フロリダ産亜種), ノーザンラージマウスバス(フロリダ半島以外の地域原産の基亜種)

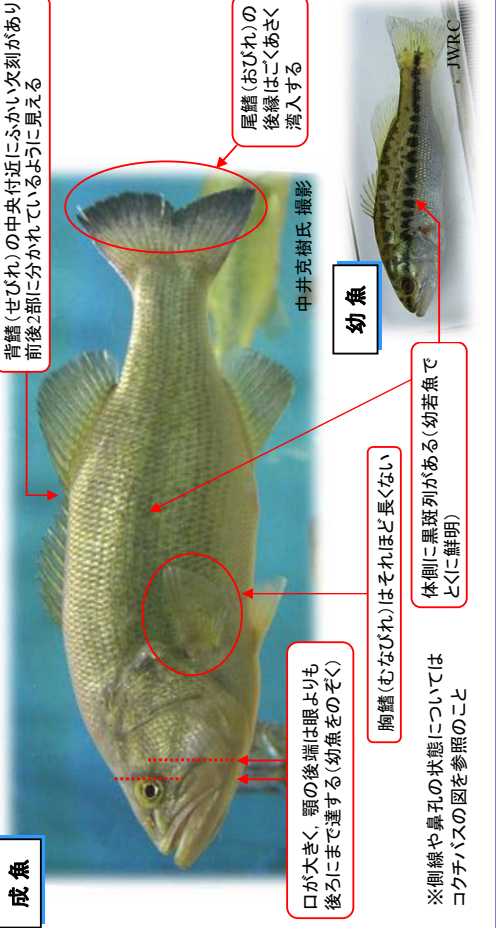
原産地と分布: 原産地は北アメリカ(メキシコ北部〜アメリカ合衆国東部)。現在では、移種により、日本を含む世界各地に分布する。

未判定外来生物: サンフィッシュ科全種(オオクチバス, コクチバス, プルーギルを除く), パーチ科の4属[Gymnocephalus, Perca, Sander (=Stizostedion), Zingel], ベルキウチイソ科の4属(Percichthys, Gadopsis, Macrillocheilichthys, Macquaria), モロ本科の2属(Morone, Dicentrarchus), ケツギヨ科の1属(Shimpercra)

種類名証明書添付生物: アカメ科の2属 (Lates, Hypopternus), ケントロポムス科の1属 (Centropomus)

形態的特徴: 体高が低い、口が大きく、顎の後端は眼の後縁下よりも後方にまで達する(幼魚をのぞく)、下顎は上顎よりも前につきだす。鼻孔は2対、側線(そくせん)は体背側の輪郭にほぼ平行してゆるやかにカーブし、頭部から尾鰭(おびれ)の"付け根"まで連続する。背鰭(せびれ)の中央付近にふかい"へこみ"があり、前後2部に分かれているように見える。胸鰭はそれほど長くない。尾鰭の後縁はごくあざく湾入する。鱗は細かく、側線鱗数は58〜75。体は淡い灰褐色〜銀白色で、背部は暗色がかかり、腹部は白色にちかい。体側に黒斑列があり(幼若魚で鮮明)、なかでもとくに鼻先〜眼から体側中央をとおり尾鰭(おびれ)基部にまで達する1列が最も明瞭で縦帯状となる。最大で全長97cmとされるが、ふつうは50cm程度まで。

成魚



中井克樹氏撮影

幼魚



オオキンケイギク

分類: 合弁花類、キク科、ハルシヤギク属

学名: *Coreopsis lanceolata*

英名: Lance-leaved tickseed

和名: オオキンケイギク

別名・流通名: ハルシヤギク属の学名であるコレオプシスで流通するものには、本種以外も含まれる。

原産地と分布: 北アメリカ(ミンガン〜フロリダ、ニューメキシコ)原産である。

未判定外来生物: なし。
種類名証明書添付生物: ハルシヤギク属全種(約120種)

形態的特徴:

花: 開花期は5-7月。頭状花は直径5-7cm、舌状花は黄橙色で花冠の先は不同に4-5裂する。筒状花も同じ色で花床に細長い鱗片がある。総苞片は2列につく。

茎: 高さ30-70cmで、束生する。

葉: 茎葉は対生または時に一部互生し、狭倒披針形。根生葉は花時にも残り、長い柄があり、3-5小葉に分裂する。両面とも粗い毛がある。



© JWRC

© JWRC

特記事項: ワイルドフラワー緑化で多用され、路傍、河川敷、線路際、海岸などで野生化した。開花期は5〜7月。ハルシヤギク属では、本種以外にキンケイギクC. drummondii、ハルシヤギクC. tinctoriaが野生化しているほか、觀賞用に育成された様々な園芸品種が流通している。

特記事項: 日本各地の河川や湖沼、ため池などに広く定着し、それらの水域や管理釣り場などで釣り魚として利用されているが、外来生物法により生きたままの個体の運搬、保管、飼養が原則的に禁止されているため、釣獲時には適正に取り扱いなくてはならない。内水面漁業や水生生物調査、自然観察会などで捕獲されることもあるが、その際の取り扱いについても同様である。在来生態系保全や漁業資源保護のために、各地で防除事業が実施されており、自治体によっては条例で再放流を禁じている。今後とも、これ以上の分布拡大の防止に努めるとともに、すでに定着している水域では必要に応じて被害の低減等の対策を講じることが望まれる。なお、防除の方針については、「オオクチバス等に係る防除指針」を参照されたい。

特定外来生物同定マニユアル

オオカワヂシャ

分類: 合弁花類、ゴマノハグサ科、クワガタソウ属

学名: *Veronica anagallis-aquatica*

英名: Water speedwell

和名: オオカワヂシャ

別名: 流通名: オオカワヂシャ。意図的な輸入や流通はない。

原産地と分布: ヨーロッパ〜アジア北部が原産、南北アメリカ、アフリカ、オーストラリアに分布する。

未判定外来生物: なし。

種類名証明書添付生物: クワガタソウ属全種(約300種)

形態的特徴:

花: 開花期は4-9月。上部の葉脇に穂状の花序を出し、直径5mm程の淡紫色〜白色の4深裂した花を多数つける。

茎: 地中を横走する根茎から茎を直立または斜上し、高さ0.3-1mになる。無毛。

葉: 無柄で対生する。長楕円形〜披針形で長さ3-7cm、幅1-2cm、先は短く尖る。上部の葉は基部が心臟形となって茎を抱く。鋸歯が細かいので全縁に近く見える。両面無毛。



特記事項: 湖、沼、河川の岸辺、水田、湿地に生育する。開花期は4〜9月。種子と根茎で繁殖する。クワガタソウ属は、日本には十数種ある。近縁種で絶滅危惧種のカワヂシャ *undulata* の花は淡紅紫色で葉縁にやや尖る鋸歯があるのに対し、本種の花は鮮やかな青紫色で葉の鋸歯が不明瞭である。本種はカワヂシャと交雑して雑種ホナカワヂシャ *Myriantha* を形成する。本種以外に、オオカワヂシャ、タチイヌノフグリ、カワヂシャモドキ、カラフトヒヨクソウ、ココメイヌノフグリ、アラサハバノウ、アレチイヌノフグリ、オオイヌノフグリ、コチンククワガタが定着している。クワガタソウ属には、園芸植物として流通しているものも多く、セイヨウトライノオ、ペロニカ、ルリトラノオ、姫トラノオ、ブルーラゲーン、ブルーテールタイガーなど総称名で流通しているものもある。

特定外来生物同定マニユアル

アレチウリ

分類: 離弁花類、ウリ科、アレチウリ属

学名: *Sicyos angulatus*

英名: Star cucumber, (One-seeded) Burr-cucumber

和名: アレチウリ

別名: 流通名: 別名はない。販売は行われていない。

原産地と分布: 北アメリカ原産、南アメリカ、ヨーロッパ、アフリカ、アジア、オセアニアに分布する。

未判定外来生物: なし。

種類名証明書添付生物: アレチウリ属全種(35種)

形態的特徴:

茎: 粗い毛を密生したついで、巻きひげは3岐し、他物に巻き付いて、長さ数〜十数mになる。

葉: 葉身より短い葉柄があり互生する。径10-20cm、3-7浅裂し、基部は浅い心形、縁に鋸歯がある。両面が著しくざらつく。

花: 開花期は8-10月。葉脇に雌雄別の花序を出し、直径1cm程の黄白色の花を着ける。果実は長さ1cm程の楕円形で鋭い棘を密生する。



特記事項: 林縁、荒地、河岸、河川敷、路傍、原野、畑地、樹園地、造林地など、日当たりの良い場所を好む。開花期は8〜10月。休眠性のある種子を多数つける。アレチウリ属は、日本に目生種はない。本種以外の野生北の報告はない。

オオフサモ

分類: 睡蓮花類、アリノトウグサ科、フサモ属

学名: *Myriophyllum aquaticum*

英名: Parrotfeather, Brazilian watermilfoil

和名: オオフサモ

別名・流通名: スマフサモ、スマフサモのほか、熱帯魚店などで、ハロッド・フェザーの名で呼ばれる。

原産地と分布: 南アメリカ原産、北アメリカ、ヨーロッパ、アフリカ、アジア、オセアニアに分布する。

未判定外来生物: なし。

種類名証明書添付生物: フサモ属全種(45種)

形態的特徴:

葉: 羽状葉が5~6(3~7)輪生する。空中葉は1~3cm間隔に着き、粉白色をおびた緑青色、長さ1.5~5cm。小葉片は、鈍頭の線形で10~15(20)対、長さ3~5mm、幅約1mm。水中葉は、茶緑または浅緑色で、長さ6cmに達する。小葉片は、ひげ状に細列する。葉の基部は左右に白色短小の毛状托葉がある。若葉には微毛がまばらにつく。

花: 開花期は6月頃。日本にあるのは雌株のみ。雌花は空中葉の葉腋に1個づつ着き、高さ約2mmの円筒状、柱頭の白毛が目立つ。

茎: 根茎は直径4~5mmでやや赤紫色、節が多く水中を匍匐しながら分枝を繰り返す。長さ1m以上になる。茎の節から、長さ10~30cmの緑色の茎を水上に出し、長さ20~40cmの糸状の根を数本出す。



ポタンウキクサ

分類: 単子葉植物、サトイモ科、ポタンウキクサ属

学名: *Pistia stratiotes*

英名: Water lettuce

和名: ポタンウキクサ

別名・流通名: 一般的な観賞用の水草としてウォーターレタスの名で呼ばれるのは本種である。

原産地と分布: アフリカ原産、アジア、オーストラリア、南北アメリカに分布する。

未判定外来生物: なし。

種類名証明書添付生物: ポタンウキクサ

形態的特徴:

茎葉: 主茎はごく短く、葉は水面に伏すか斜上してつきロゼット状に広がる。葉はピロート状に短毛を密生して水をばじき、裏側に突出する平行脈があり、倒長三角形~倒卵形で長さ30cmに達し、基部はしだいに狭まり、頂部は切形ややや凸凹がある。葉の間から円柱状の走out枝を出し、先端に子苗をつける。

花: 開花期は5~10月(暖地では周年)。葉腋に、長さ5mmほどの黄緑色の仏炎苞に包まれた花序を多数つけるが、小さくて目立たない。

根: 羽毛状に分裂して水中に垂れ下がりに、ときに水底につく。



特記事項: 湖沼、河川、池、水路、一部の休耕田などの浅水中に群生する。栄養繁殖が旺盛で地下茎で繁殖する。フサモ属は、日本ではオオフサモ *M. spicatum*、ホサキフサモ *M. verticillatum*、オグラフサモ *M. oguraense* の4種が自生する。これらのうち、オグラフサモは絶滅危惧II類に指定されているので注意が必要である。在来種及びsp.を含む10種程度が観賞用等に流通、販売されているが、本種以外の野生化の報告はない。

特記事項: 池沼、河川、水田、水路など日当たりの良い所を好む。種子で越冬できるほか、根茎や越冬芽による栄養繁殖が極めて旺盛で、九州以南では野外で越冬、増殖している。走out枝が折れ易いので、機械的に除去するのが極めて困難である。ポタンウキクサ属の植物は本種のみである。